校友會誌

第四拾號

昭和六年三月

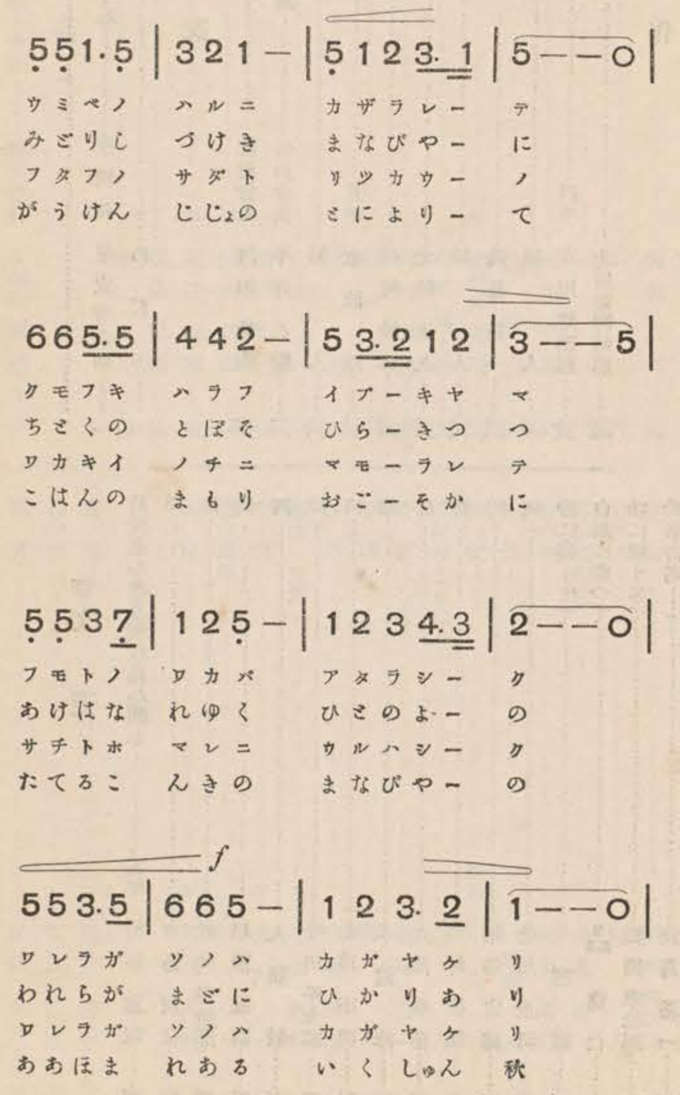
滋賀縣立彦根中學校

誌會友校

號十四第

彦根中學校校歌

1=96　　へ調四分ノ四拍子



彦根中學校々歌

湖べの春にかざられて
雲ふきはらふ膽吹山
ふもとの若葉あたらしく
われらが園はかがやけり
緑しづけき學びやに
智徳のとぼそ啓きつゝ
明はなれゆく人の世の
われらが窓に光あり
不撓の決意と力行の
わかき生命にまもられて
幸とほまれに美はしく
われらが園はかがやけり

剛健自助の門によりて
湖畔のまもり嚴かに
たてる金龜の學びやの
ああほまれある幾春秋
金剛不壞のこゝろもて
つとめ勤しむ森のかげ
われらが窓の燦爛と
ああほまれある幾春秋
天のかがやき地に享けて
こゝろ澄みたる琵琶の湖
金龜の春とこしへに
われらが園は新たなり

校友會誌（第四拾號）目次

口繪
教育勅語御下賜四十年……學校長　足立芳之助……一
みちに立つ……あだち……二

▽論説

偶感……特別會員　臼田德衞……一〇
東京時代短歌史概觀……特別會員　平井乙麿……一三
夕暮牧水先生鑑賞……同　人……一六
困苦の利用價値……五年　水波淳……二三
宗敎を觀る……種村捨三……二四
死なして價値あらしめよ……北村正久……二六
苦難の惠……同　人……二八
活動寫眞論……淺島希一……三〇
劍道を鼓吹す……同　人……三二
雄辯の力……四年　古川傳三郎……三三
青年の天下……北川東海林郎……三四

▽創作

希望……五年　淺島希一……三六
我が校歌……西崎勝之助……三七

▽文苑

前校長を送り現校長を迎ふ……五年　粕谷定輝……四八
同……中島茂信……四九
同……松岡孝治郎……四九
同……杉橋義郎……五〇
同……大照敏……五一
同……寺田平太郎……五二
同……北川正明……五二
同……水波淳……五三
同……久馬孝衞……五四
時……西村敏雄……五五
同……粕谷定輝……五六
同……北川正明……五七
秒に鞭うちて……大照敏……五八
白馬に乘つて……泉泉泉　堯仁……五八
砂に鞭うちて……松岡孝治郎……六〇
珍名奇名……淺島希一……六一
別れし友の追憶……同　人……六二
嗚呼!!熱血の甲子園……同　人……六三
追憶の舍……五年　松岡孝治郎……六四
離愁……同　人……六五
地上……廣田萬祐……六七
あの子……同　人……六八
小品二題……同　人……六八
過去と未來……田中逸雄……六九
絲瓜の下で見た夢……泉泉　堯仁……七〇
野球……四年　木野戸勝逸……七七
惜別……古川傳三郎……七八
兵營の朝……村川文男……七九
敎練の汗から……三年　竹内一……八〇
帝國館……同　人……八一
案山子……久木八十八……八二
晚夏の夜……柴田正己……八三
秋……二年　橋本末藏……八四
思ひ出……一年　東辻清彌……八五
秋の彼岸……居長賢藏……八六
あゝ發車の音……同　人……八七

▽詩藻

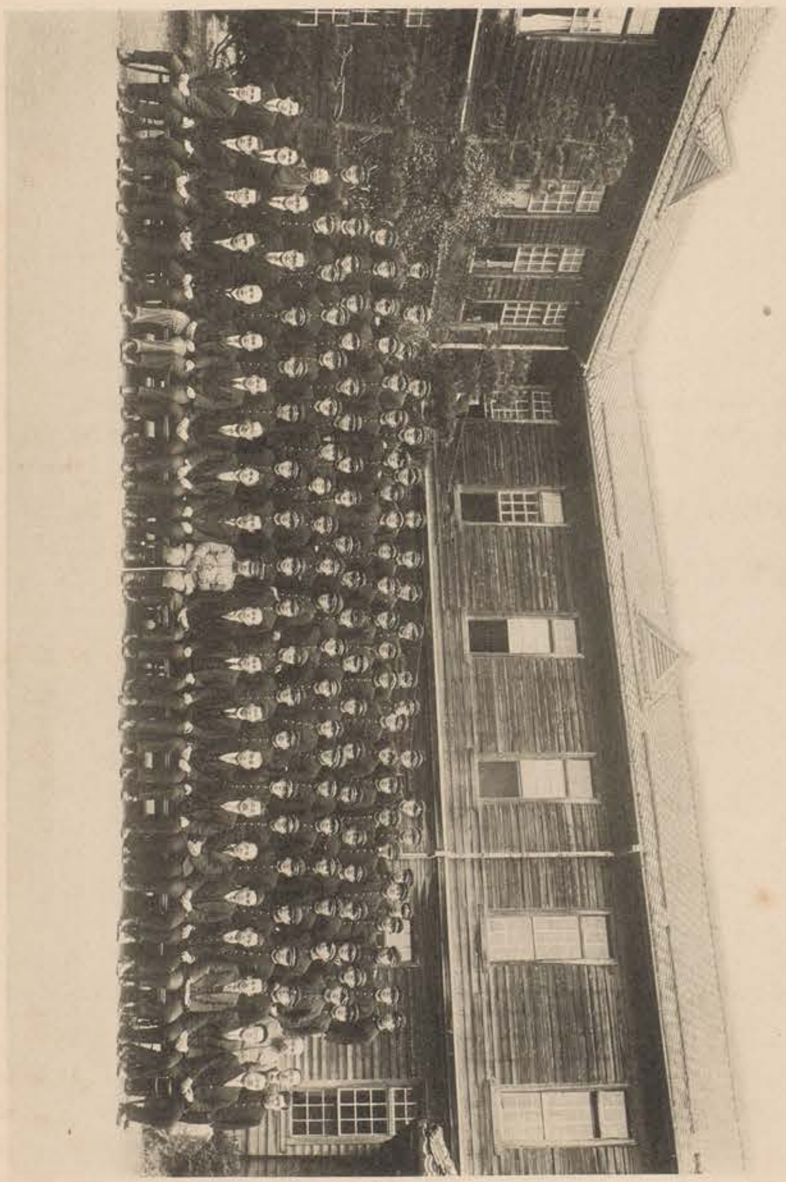
五月我校依例催端艇大會於……特別會員　大和田清朋……八八

▽詩

日本青年の歌……五年　泉泉　堯仁……八九
生存……五年　辻三雄……八九
罪の子……廣田萬祐……九一
夕立……西崎勝之助……九二
分列式……同　人……九二
思ひ出の歌……淺島希一……九三
春の朝……福田杲正……九三
童謠……川那部一誠……九四
熱狂……四年　松宮實……九四
はかなきもの……同　人……九五
街頭……岩崎助一……九六
初秋……同　人……九六
歩み……三輪隆造……九六
童謠　三篇……名畑惣次……九八
空想……三年　竹内一……九九
空の風景……同　人……九九
就床……一年　西村英男……一〇〇

▽俳句

青空……五年　淺島希一……一〇一
雲の峰……松岡孝治郎……一〇一
雜詠……福田杲正……一〇二
犬……三年　竹内一……一〇二
雜詠……一年　西村英男……一〇二



▽短　歌

わびしさ……………………五年　松岡孝治郎……一〇三
雜　詠……………………浅島希一……一〇四
新　聞……………………三年　竹内一……一〇五
秋の夜の學び……………一年　居長賢藏……一〇五

▽紀　行　文

河内に向ふ………………五年　山本可人……一〇六
南國の旅…………………松岡孝治郎……一〇七
夏の中仙道を下る………浅島希一……一一〇
阿蘇に登る………………種村捨三……一一三
山へ登る…………………田中逸雄……一一四
敦賀兵營宿泊の日………西崎勝之助……一一五

▽學校記事

第五學年修學旅行記……五年　目加田榮藏……一一七
同…………………………杉橋義郎……一一九
第四學年修學旅行記……四年　松宮實……一二八
同…………………………吉原茂……一二八
同…………………………近藤謙次郎……一二八
敦賀兵營宿泊記…………五年　大照敏……一三四
同…………………………藤田富男……一三五
同…………………………泉泉泉　堯仁……一三八
同…………………………北川正明……一三九
縣下聯合演習參加記……五年　大照敏……一四一
同…………………………泉泉泉　堯仁……一四三

▽便　り

母校の諸君へ……………彦根高商　組田重嘉……一四六

▽各部部報

武道部……………………一四九
短艇部……………………一六一
野球部……………………一六七
庭球部……………………一七九
競技部……………………一八三
水泳部……………………一八四

▽雜　錄

學校日誌抄………………一八八
昭和五年度校友會各部役員……一九一
會計報告…………………一九三
編輯後記…………………一九四

教育勅語御下賜四十年

學校長　足立芳之助

教育勅語は　皇國生命の根幹である。　聖旨いとも深遠、之を思想的、哲學的に研究するのは容易の業でないが、我等は日本人のありがたさに直ちにその中心生命を靈感し身に體して之を實行することが出來る。

聖上陛下を拜し奉るとき、我等は尊嚴侵すべからざる神聖さ神々しさを感ずるとともに我等はまた慈父に會へるが如き親しさ懷しさを覺える。　天皇は我等の　大君であらせられるとともにまた我等の大親でもあらせられる。帝國は　皇室を中心とする三千年來の一大家族。我等の　大君を思ひ忠誠を竭すは即ち子の親に對する思ひである。　君臣はそのまま父子であり、忠孝一本の至境こそ建國以來一貫せる我が國體の精華である。

歷代の　天皇が御一身の御事は些かも顧み給はで只管民草の榮え行かんことをのみ御念願遊ばされたことはまことに尊い極みである。我が國民は不斷に　大君の仁慈の御德に浴してその生を養つてきたのであつて、國民の　皇室に對する忠誠はかうした大恩の反映として自づと國民の心の中に湧いてきた已むに止まれぬ一大精神の現はれであり、　皇室の親ごころに對する民草の子ごころである。　大君は私心なき大御心をもつて民草を愛撫し給ひ、民草は私心なき至情をもつて　大君を敬慕し奉り、以て渾然たる　君民一體の德風が釀成せられたのである。

忠孝一本、　君民一體の我が國に於ては　天皇は即國家であり、國家は即國民である。國家といひ　皇室といふ、將た天皇と申し國民と呼ぶ、その極致に於ては不二である。わけても　明治大帝は至眞、至善、至美、至聖、人にして神にまします聖帝であらせられ、而してその大人格、大精神が　教育勅語の形ちに於て表現せられたのであるから、我等は　勅語を通して大帝の御英姿を拜し奉り、神國の正しき姿を見、また我等の步むべき大道を見出すことが出來るのである。我等にして若し之が實行を完全の境にまで進めるならば、我等は終に　大帝と一體となるの絕對境に逍遙することも出來るのであらう。

教育勅語御下賜四十年の記念日に際り謹みて所感を錄し、粉骨碎心以て奉公の誠をいたさんことを誓ひ奉る。

みちに立つ

あだち

ぐづぐづしてゐる時でない。働かなくてはならぬ。はたらかないではゐられない。

もしいおのれなかなぐりすてゝ、他のために働くとき、自は「光り」をはなつ。めいめいが、おのれのためのみをさ圖つてゐたのでは、他はたゝぬ。自もたゝぬ。おのれを空うして他をたてるとき、他も自も、ともに存する。

おのれをすてた生徒の精神は、學校の精神と融合する。おのれをすてた師の精神も、學校の精神と融合する。生徒の自も、師の自も、學校の自も、純なるかたちにおいては、一つである。生徒と師と「一つ」となつて、光輝ある歴史をもつ「彦中精神」の發揮に努力するとき、われらの學校は「光り」をはなつ。

「一つ」の精神――道――にむかつて、自の努力をさゝげるとき、われらは「道」にたつてゐる。道にたつ自は、偉大である。絶對である。神聖である。さゝやかな努力であつても、それが道にたつての努力であるとき、自は神力を發揮する。

道にたゝぬ努力は、たとひ大なるものであつても、意義をなさぬ。

國家をどうするか。これはおほきな問題である。けれども、國家をどうするか、といふことを眞劔につきつめてゆくとそれはわれらの學校をどうするか、といふことになる。そして、われらの學校をどうするか、といふことは、われらの自をどうするか、といふことになつてくる。國家をどうするか、といふことは、であるから、生徒と師の「自」をどうあつかふか、といふことである。國家だとて、自をおいて他にあるのではない。

われらの學業に精進する、刻々の努力――われらの道にたつ、純なる努力――師と生徒と融合してなす、聖なる努力：：：：はそのまゝ、國家と一體となるの努力であり、國家の生命を日に新たに、日に日に新たに「創造」してやまぬ努力であるのである。

自――學校――國家――道――「一つ」――創造：：：：：道にたつ、われらの「努力」の尊さよ。

――昭和六年一月一日――

教育勅語謹解

足立芳之助

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世世厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス

『朕』は天皇の御自稱、我の義である。

『惟フ』は思ふの義、深く考へてみることである。

『我カ』は皇祖皇宗を親みて仰せられたのであつて、我等がといふほどの義である。

『皇祖皇宗』は皇室の御祖先の御方々といふことである。

『國』は國家の義、我が大日本帝國のことである。

『肇ム』は肇造とか創造とかの義、建國の後に於て次第に生々展開して行くことも含まれてゐるのであらう。

『宏遠ニ』は廣大高遠、弘宏遠大の義、廣く大きく未來永遠に亘りて愈々益々榮え行くやうに御建國になつたといふことである

『徳』は天皇の御惠みの義、御仁徳のことである。

『樹ツ』は樹立で植ゑつけることである。

「深厚ナリ』は君徳が民草の心の中に深く根をおろしてゐることである。深遠厚高の義。

『我カ』は前のと同樣、我等がといふほどの義で親しみの意がある。

『臣民』は我が臣民の凡てをさすのである。
『克ク』は能くと同じく成し遂げる意がある。
『忠』は誠の心をもつて天皇に事へることである。天皇と申せば國家も含まれてゐる。天皇と國家とは一體である。
『孝』は誠の心をもつて父母に事へることである。父母の中には祖先も含まれてゐる。
『億兆』は大數であつて、人民といふことである。
『心ヲ一ニシテ』は戮力一心、同心協力などと同義で，同心一體となつてといふことである。
『世世』は代々といふことである。
『厥ノ』は其のと同意義である。
『美』は美しい外に善の意もある。物の正しく充實した姿で、茲では臣民の忠孝の美風をいふのである。
『濟セルハ』は成せるはであつて、忠孝の美風を發揮したことである。
『此レ』は「我カ皇祖皇宗……世世厥ノ美ヲ濟セルハ」を指す。
『國體』は國柄の義である。
『精華』は雜りのない純美といふことである。
『國體ノ精華』は我が國の我が國たる所以の純美の特質を指すので、是れあるが故に我が國體は世界にその比を見ないのである
　我が帝國は皇祖皇宗の肇造せられたものであつて、その建國の規模は極めて宏遠にして恩德を國民に施されたことはまことに深厚である。而して臣民は皇祖皇宗の御恩德に感じて忠孝の誠を勵み、忠孝一本、君民一體の國體が展開したもので、之を「我カ國體ノ精華」と仰せられたのである。
『教育』は國民としての教育といふことで、廣い意味である。
『淵源』は基づくところ、教育の由つて出づるところ、教育の理想とするところの義である。

『此ニ』は『此レ』と同じことを指す。
『存ス』は在るといふことである。
　教育の本旨も亦忠孝一如、君民合體の我が國傳來の道を涵養するにあると仰せられたのであつて、我等教學の目標炳として日星の如しといふべきである。

爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ知能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ

『爾』は汝等の意である。
『爾臣民』は我等國民に向つて「汝等臣民よ」と親しく御呼びかけになつたのである。
『父母ニ孝ニ』は至誠をもつて父母に事へることで、父母は延長すると祖先に及ぶ。孝は自己の根源に歸へることともいへる。誠ならざれば根源に歸一することは出來ない。
　父母に孝行をせよと仰せられたのである。
『兄弟』は男女の兄弟、即ち兄弟姉妹をいふ。
『友』は友愛、即ち兄弟相親愛することである。
兄弟姉妹は仲よくせよと仰せられたのである。

『和』は和合の意、爭ひなく愛の心をもつて融合することである。

夫婦は和合せよと仰せられたのである。

『相信シ』は信をもつて交ることである。信とはいつはりなく、正直なことである。

友達は互に信實をもつて交れよと仰せられたのである。

『恭儉』はつつましやかに、ほどほどを守ることである。

『己レヲ持シ』は我が身を律してゆくことである。

恭儉の德をもつて自己を律して行けよと仰せられたのであつて、恭儉とは自己に對しても、他人に對してもまた物に對しても現はれる德である。

『博愛』は博く世間の人に慈愛を及ぼすことである。自己を擴充してゆくと他人も自己の中に包含せられるやうになつてくる。

『衆ニ及ホシ』は多くの人に次第に及ぼして行くことである。親より疎に近より遠に及ぶ意。かくて終には禽獸草木にも及ぶのであらう。

自分だけのことを考へないで、廣く世間の人に慈愛を及ぼして行くやうにと仰せられたのである。

『學ヲ修メ業ヲ習ヒ』の學は智能を働かせる學問のことで、業は手足を働かせる方面からみた業務、作業を指す。通じて廣義の學業を修習することであらうか。

『以テ』は學を修め業を習ふことに依つての意である。

『智能』は知識能力のことで、廣義のはたらきの意であろ。

『啓發』は開き伸ばすことである。

『德器』は道德的品性とか、人格とかの義である。

『成就』は完成の義、德の備はれる人となることである。

學業を修習して智德兼備の人格者となれよと仰せられたのである。

『進テ』は學業を修習して智德を磨いた後は更らに進んでの意である。

『公益』は公共の利益、即ち社會國家のためになることを指す。

『世務』は世の中の務め、即ち社會國家のためになる仕事を指す。

世の中のためになることをせよと仰せられたのであつて、公益は利益の立場から、世務は仕事の立場から見たのである。

『常ニ』は恒にである。不斷に、いつもの意。

『國憲』は國家の根本の規則といふことで、皇室典範及び帝國憲法を指す。

『國法』は國家の規則のことで、法律、命令等を指す。

平素國憲を尊重し國法を遵守せよと仰せられたのである。

『一旦』は一たび、若しの義である。

『緩急』は急なこと、非常の事變といつた意である。緩は添へ字で、急の方に意味がある。

『義勇公ニ奉シ』は義より出でたる勇氣を奮ひ起して皇室のため、君國のために一身をささげることである。公は天皇と見ても皇室と見ても、また國家と見ても同じである。

一朝大事の起つた時には身命をささげて國家のために盡せよと仰せられたのである。

『以テ』は「父母ニ孝ニ……義勇公ニ奉シ」を承ける。

『天壤無窮』は天地とともに窮りのないといふことである。

『皇運』は皇室の御運、皇位の御盛運、皇國の隆運といふことである。

『扶翼』は助ける意味である。

父母に孝なるより義勇奉公のことに至るまで各種の國民道德の內容を充實、實現することに依りて天地と共に窮りなき皇運

を助けよと仰せられたのであつて、我等の生命の最終の目的とすべきところを昭示し給うたのである。我等の生活の最高目標絶對理想は天壤無窮の皇運を扶翼するにあるのであるから、平時にあつても非常時にあつても我等の生活は常にこの唯一無二の目的に合致してゐなくてはならない。若し合致してゐないとするならば其は正しい生であるとはいはれない。我等の生にして純であり至れるものである時は必ず皇運を扶翼してゐることになつてゐる。

是ノ如キハ獨リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン

『是ノ如キハ』は「父母ニ孝ニ……皇運ヲ扶翼スヘシ」を承ける。
『獨リ』はただにといふことである。
『忠良』は純忠とか精忠とかいふ意、忠に純らなることである。
『爾祖先ノ遺風』は汝等臣民の祖先が遺し傳へた美風といふことである。
『顯彰』は顯かにし彰はすことである。
『足ラン』は十分に出來るであらうといふことである。

「父母ニ孝ニ」以下の道をよく守りて天壤無窮の皇運を扶翼する者はただ單に忠良の臣民であるといふばかりでなく、またその上汝等の祖先が遺した美風を顯かにし彰はすに十分であらうと仰せられたのである。

斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ倶ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス

『斯ノ道』は「父母ニ孝ニ……皇運ヲ扶翼スヘシ」を指す。

「斯ノ」は此のであり、「道」は我等の履み行ふべきことである。

『遺訓』はおのこしになつた御教訓といふことである。
『子孫』は皇室の御子孫のことである。
『臣民』は我等臣民及びその子孫のことである。
『倶ニ』はみな齊しくの意である。
『遵守』は守り行ふことである。
『之ヲ』は「斯ノ道」のことである。
『古今ニ通シテ謬ラス』は古も今も間違のないことである。
『中外ニ施シテ悖ラス』は我が國で行つても外國で行つても理にそむくことはない。内外人共に通ずる眞理であるの意である。

第二段で御示しになつた御教訓は皇祖皇宗の御遺しになつた御訓へであつて皇室の御方々も臣民も共に齊しく遵守すべきもので、その大精神は古今東西に通ずる大道、絶對的の大眞理であると仰せられたのである。

朕爾臣民ト倶ニ拳拳服膺シテ咸其德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

『拳拳服膺』はつつしみて奉體實行することである。「拳拳」は奉持の貌、「服膺」の膺は胸に同じく服は着くる義である。
『咸』は皆であつて一人の例外もなくといふことである。

『其德ヲ一ニセン』は皇祖皇宗の御遺訓を遵奉して其の德を同一にしようとのことである。『庶幾フ』はかくあれかしと切に望むことである。

畏くも　明治天皇が臣民とともにこの御教訓を奉體實行して誰も皆その德を同一にするやう切に望むと仰せられたのである。我等臣民たるもの一身をささげ至誠以て聖旨に副ひ奉るべく奮勵せずして可ならんや。

偶感

特別會員　臼田德衞

概して中學時代は身体的方面にも亦精神的方面にも著しい變動を生ずるものである、即ち身体各部が急に發達し、精神の發達も急速の勢を以て進む。感情は強く深くなり文學・詩歌・藝術などに熱中するも或は道德上の善惡正邪についても、極めて敏感で自己を犠牲にしてまで他の爲に盡し、身を輕んじて愛と義とを重んずるに至るも此の時代に多い。知識慾は著しく發達し爲に一時に有らゆる眞理を得んとして（總て眞理は有たんと努力する處にある、其の結果ではない、結果は眞理の一の現れであるが）綿密なる科學的研究よりも、空漠たる所謂哲學的思索に耽ること多く、理想徒らに高くして實力これに伴はず、萬有の眞相を把握せんとして焦躁し、其の志の成らざるを見て非常なる失望に陷り易い。これを要するに同時代は身体に於けると同じく、精神に於ても一の激動期であつて極端より極端に走り神と惡魔が急激に更代し易き時代である。此の特徴は中學生日常生活にも幾多現出せらるゝが、就中學業・運動の兩方面に其の色彩が濃厚に顯れてゐる。而してこれが現時往々にして兩者の平衡を失し、其處に所謂運動屋・勉强家てふ劃然たる區別が招來せられたるは否定し得ざる事實である。

一体運動をすれば勉强が出來ないとか、勉强をすれば運動が出來ないとか學業と運動とは斯様な矛盾的關係にあるものであらうか、然るに學生の中には此の誤れる抽象的の見方、換言すれば只結果の方面のみを見て、其の據て起る原理を考へずしてあたら有爲の學才の所有者も、亦天才的運動の萠芽を有する者も其の本領を充分に發揮し得ずして、青年期を經過する者のあるのは誠に遺憾の極みである。もう一歩進んで深く強く學業、運動兩者の關係を考察し確乎たる見解の上に在つて其の道に勤めたなら眞の運動家となり又眞の勉强家となり得ると思ふ。

鄕土の先人にして、賢哲なる中江藤樹先生は翁問答の中に文と武の關係を次ぎの如くに述べて居らるゝ。

「天地の造化一氣にして陰陽の差別ある如く、人性の感通一德にして文武の差別あれば、武なき文は眞實の文にあらず。文なき武は眞實の武にあらず。陰は陽の根となり、陽は陰の根となる如く、文は武の根となり、武は文の根となるなり。天を經とし地を緯として天下國家をよく治めて、五倫の道を正しうするを文といふ。天命を畏れざる惡道無道のものありて文道をさまたぐる時は、武は刑罰にて懲し或は軍を起し征伐して天下一統をなすを武といふ。然る故に戈を止むるといふ二字を合せて武の字をつくりたり。文道を行はんための武道なれば、武道の根は文なり。武道の威を用ひて治むる文道なれば文道の根は武なり。その外文武の二は離れざるなり。云々。」

誠に學業は運動の根となり又運動は學業の根たるべきもので此の兩者は兩立關係にあるものである。文武兼備とは往昔の武將のみが具現したものではない。誰でも有てるものには與へられるものである。今若し學生にして只運動のみこれ事として學業を顧みない者ありとすればそれは古への武士が殺人劍のみを磨くに類するものである。劍の修業と云ふ事から、始めは身を守り、進んでは他者を侵害して徒らに私利私慾に陷つた武士の最後が如何なる者であつたかは歴史が明瞭に教へてをる。

只一個の武辯を以て、よく一城、一國の主となり得た武將は未だ嘗て聞かない。一城、一國の主となり得た者は武力の外に必ず其奥には深き學識が潜んで居たのである、多くの武將が中々の學才を有し將又一種の悟道を備へたるは恐異である、又自ら其を有しないにしても自分を輔佐する者には必ず文人あり、或は名僧があつたのである。「斯くの如くに一城、一國の主となり得たものは一面に於ては武を錬り又内面的には絶えざる自己修養をなし、何れも文武兩道の達人で人格的修養に意を用ひたのである。

古への名將の歩みし道は又以て現在の學生の範とすべきものではなからうか、今や各種競技は隨所隨時に行はるゝ、此の機に際し覇業を成さんとすれば先づ內外の修業が第一である、外技を錬磨すると共に內學業に精勵し、其の內外の調和する所に眞の實力は生じ其の實力の發揮こそ自己をして偉大ならしめ又學技をして重からしむるものである。

藤樹先生又曰く

「文武各々に德と藝とある。文の德は仁であつて、之の藝は文學禮樂書類をいひ、武の德は義であつて之の藝は軍法射術兵法を指す。人は根本の德の涵養を第一に努め、枝葉の藝を第二に習ひ、本末兼備を理想とすべきであつて之を眞實の文武といひ眞人といふのである。もし兼備し能ふべくんば寧ろ本のみを取るべきである。本を捨てゝ末許り學ぶは僻事である。」と。

此の教訓を体して學生たる者の殊に運動家たる者の內外相即的に一路向上へと精進されん事を切に望む次第である。

東京時代短歌史概觀

特別會員　平　井　乙　麿

幕末から明治初年の歌壇の中心勢力を形成したものは桂園派(香川景樹の亞流)であつた。即八田知紀の門を出た高崎正風が御歌所々長となつて急に勢力を增し在來の詞藻と形式を遵奉する人々は皆その傘下に蝟集した。小出粲・坂正臣・稅所敦子・海上胤平(胤平だけは萬葉風)等がそれである。

併し舊樣墨守の點では皆同軌で文學の意義を解せず徒らに三十一文字を組合せて樂しむに過ぎなかつた　かやうな時に國學復興の氣運に際會して和歌革新の氣運も亦勃興して來た。而して作品を以て明治新派を樹立したものに、落合直文(萩の舍。明治三十六年沒。四三)は歌題の擴大をして發想を自由にし、舊形式打破を叫んで擬古主義に對する浪漫主義を提唱したものであつた。併し直文は全然舊殼を打破し得ないで眞の革新は門下の手に殘つてゐた――鐵幹。躬治。薫園　紫舟

與謝野鐵幹。晶子は日清戰爭の直後を受け血潮のたぎる青年の共鳴を受けて歌壇を席捲した風があつた。その男の子の歌は代表するに充分な作である。その後明星の中心は晶子に遷つた。その歌風の特異な點を擧ぐれば――近代的神經の鋭さ。既成道德に對する反逆。官能的妖惑的。戀愛至上主義的な點に於て當代の歌壇を支配してゐたものであつた。

金子薫園の白菊會と尾上紫舟の車前草社は明星一派の運動を非として敍景を唱へ清新調を叫んで改革を企てた。これから第二次の革新を萠芽するに至つたのである。

正岡子規(竹の里人)は江戶末期の田安宗武。平賀元義。橘曙覽を尊び萬葉復歸を主眼として純一な心境平淡な自然を歌ふ歌俳一如を說いて素材の擴充を計り寫實客觀を尊んだのである。この一派はアララギ派となつて大正歌壇の中心潮流をなすに至つたものである――伊藤左千夫・長塚節・齊藤茂吉・島木赤彥等はその主なる門下生であつた。この直文・子規に次いで改革に協力したものに

佐々木信綱の竹柏會がある。この風調は雅趣を尊び穩健で新風を有し新舊和歌の調和に盡力したものである。

今之等の歌風を概括してその相違點を明示するならば、

1、遊戲から眞劍になつた。

2、花鳥風月趣味に比べて遙に內包する所が擴大された。

3、歌詞の制限から脫して用語の自由になつた事。殊に枕詞。緣語の虛字を捨てて實字を攝取する傾向が著しい。

4、人事自然に對して觀照の態度が變つた。

5、個性の表現に努めたこと。此の點御歌所には全く無かつたことである。

以上の時代は尙歌壇に於て新舊錯綜の狀態を持續してゐた――がこの時に、

石川啄木(明星派)は生活に即すると共に從來の格調の制約から解放された歌風を示すに至つた。貧と病にやつれた悲痛を抑

へきれない奔放の意氣を歌つて深刻な人間苦の藝術を建立したのである。その傾向を追ふものに土岐善麿があり共に生活派と稱せられた。

前田夕暮（菜舟の車前草社より出づ）は客觀的であり理智的であつた。短歌の有する情味の凡てから脱離して凡人生活を如實に歌はんとした歌風を持つてゐた。彼も亦啄木の如く意識的に典型打破を叫んだ。然し昭和に於ての彼の改革は短歌の本格は逸脱したものであらう。

若山牧水（夕暮と同門）は夕暮の客觀的であり理智的であるに反して自然の心に突入して自己を歌はうとした主情的な歌人であつた。この兩者は自然主義に支配されて浪漫派の明星一派が衰へるや大正にアララギ派の擡頭する迄歌壇の中心人物となつてゐたのである。

上述した三者の歌風の如く實生活に即した歌風が瀰漫する時に當つて短歌を享樂の世界にまで持込んだものがある。それは吉井勇（明星派）であり。

北原白秋（明星派）は微妙な旋律と纖巧な感觸とに官能の世界を歌つた。實に彼の藝術は技巧一點張と云つて好い技巧に優れてゐる。

大正時代から漸次擡頭して來たアララギ一派は遂に歌壇の主流となつて蒼枯簡素な萬葉調に終始してゐた。

附記——以上の小稿は筆者の私觀ではない。鈴木氏の文學史潮を借用したに過ぎぬ。それに齊藤氏の明治大正歌壇史と松田氏の歌壇系統圖と尾山氏の明治短歌小史と各雜誌を引證し筆者の私見は殆ど加へてゐない。此の點明記して置く以下の文責は筆者に在る。

上述した樣な狀態に於て昭和の歌壇に持ち越された歌壇は是に第三期の改革に逢遭したのである。その理由を簡約するならば近代文明の種々相（主として機械工業の發達——科學の發達）は歌壇のみを安穩に置かなかつた。總て現世に生活する以上この科學の發達はあらゆる我々の生活樣式を變改した。その間に於て藝術である短歌のみが舊樣を守つて進展を阻害される筈は

なかつた。短歌と云ふ制約された形式は近代文明を表現するに餘りに自由でない。短歌を趣味として逃避するならば定形主義も好いであらうが文學本來の意義から論ずれば短歌も時代と共に進展しなければならない。是に於て呼吸の關係、步足の關係自由に思想を發表する方法として其の他總て近代主義的な生活樣式を表現する爲に舊定型歌は解体されて自由律短歌が唱導されるに至つたのである。之も文學本來の意義から理論上は正當な主張を持ち得るが短歌の本格は逸出したものであらう。

尙マルキシズムが讃美せられる樣になつてマルキスト歌人が出た。此の派は短歌を階級意識と關係づけて短歌の辨證法的な發展と階級意識藝術たらしむる企圖を持つた。此の歌風は全然形式に拘泥なく構成的に闘爭意識（プロレタリアイデオロギー）を表現したものである。リズム或は音數に無制約である爲短歌として民衆に認識させるには緣遠いものがある。理論に於て許容されてゐるのみである。

この近代主義的自由律とマルキシズムを奉ずるプロレタリア短歌を二大主流とし、自由律から派出したものに、

超現實主義短歌がある。これはフロイドの夢は現實よりも正確なりと云ふ夢の分析から發源したフランス詩壇の影響を受けたもので——此の現實は如何に客觀的に忠實であつても主觀なしに客觀に接する事は出來ない。その主觀は夢よりも不正確なものであるから客觀的に觀た現實の認識、把握には誤謬を抱含する。故に經驗の世界を破る事が現實を認識するに尤も忠實なる所以であると說くのである。そこで殘された問題は唯如何にして經驗界を破るかと云ふ方法論のみ——技巧——が懸案となるのである。作風は未經驗界であるから難解で普遍性妥當性を全然有せない。また最近興起したものに

藝術派短歌なる運動がある。その主張する處は判明しないのであるが——與へられたる定形にポエジイ（純粹詩）を盛り文語を使用して作る短歌らしい、まだ提唱も不明瞭でありそこで作品について云爲即斷することは出來ない。

以上が最近の潮流であるが更に之を大別するならば、

舊短歌（アララギズムが代表す）と自由律歌（詩歌一派が代表し上述の小派が附隨す）とに區分する事が出來よう。（上述の問題は本質的、方法論的或はイズムに於て餘りに大雜把であるがその細詳檢討は他日詳論し得る機會に讓る。）

之を比較して見るならば、

1、口語を使用し口語的發想法をとること。
2、形式制約を破壞し自由律をとる。（三十一音を基準とする故基準律とも云ふ）
3、趣味に墮したる短歌を近代的に甦生させよく時代相を反映せしめたこと。
4、階級的意識に自覺せること。
5、歌題――素材の擴充。
6、官能的。官覺的である。
7、道德に對して懷疑的態度をとる――新道德の樹立。
8、理智的で所謂短歌的情念に溺れない。
9、自然發生的で素朴なこと。
10、ネオ、ローマン的傾向を帶びて來たこと。

等を指摘し得ることが出來よう。

この間に在つて

前田夕暮はその一派（雜誌詩歌に據る）を率いて自由律短歌を提唱して歌壇に望み今や歌壇は嵐渦の占有する所となつてゐる理論としては舊短歌概念を克服したのであるが正非當失は歷史の裁斷に委ねて擱筆する。

夕暮・牧水先生鑑賞

明治・大正・昭和時代を通觀して概略ながら小さい短歌史を展開した僕は、再轉して僕自身直接に指導育生された前田夕暮先生と間接に影響指導を蒙つた若山牧水先生（僕は定形律歌時代には歌集別離時代を中心に影響を受けてゐる）の偉大な藝術を思ふと亢奮を感じるものである。靜に味到しよう。

併し其の結實した藝術を論じるまでの過程伏線として小論ながら背景に筆を借つて理解を容易にしなければならない。

明治廿年末所謂新派和歌と稱するものが擡頭して在來の和歌を排擊し改革して新派和歌を樹立した功勞を擔ふべきものを大別すると次の三者に歸するのである。

落合直文を盟主とする淺香社（主な門下生。尾上柴舟・金子薰園・與謝野鐵幹等々）と、正岡子規の流れを掬む根岸派（子規沒後繼承すべき人なく稍後れて長塚節・伊藤左千夫・齊藤茂吉・島木赤彥等々）と、佐々木信綱を宗とする心の花社（木下利玄・川田順・九條武子等々）であると思ふ。上揭した結社の運動に依つて新派和歌が樹立されたのであるが明治四十年頃には此の創業時代が整備され守成の域が解体せられようとして次の時代の胎生期に入つてゐたのである。

恰もその頃縱橫の才筆。絢爛な詞藻に衆目を眩してゐた明星派（鐵幹・晶子一派）は明治三十八年前後に主張唱導された自然主義の影響に脆くも支配されて悲壯な沒落への一路を走り續けてゐた當代その自然主義の新思潮に舟を泛べて青年の絕大な思慕と支持と謳歌のもとに歌壇に君臨し支配したものは實に我が夕暮・牧水先生だつたのである。その系統を明にするならば牧水夕暮先生二人とも尾上柴舟博士の門下から輩出したのである。

明治三十八年前田夕暮先生は雜誌向日葵（若山牧水・三木露風・正富汪洋・富田碎花・有木芳水・內藤晨露・牧水先生を除き餘は詩壇に轉じた）を發行し續いて翌三十九年白日社を創立して機關雜誌「詩歌」發行。大正七年「詩歌」廢刊。大正十三年四月北原白秋・土岐善麿・木下利玄・古泉千樫・吉植庄亮・折口信夫等と「日光」を創刊して大正十五年十二月に及んだが夕暮・白秋兩氏の勢力爭ひから遂に廢刊。昭和三年「詩歌」復活。短歌革新の爲自由律（基準律）短歌を唱導されて今日に到る。

明治四十二年若山牧水先生は機關雜誌「創作」創刊同年廢刊。翌年復刊。休刊二回ありて現今に至る。牧水・白舟・茂吉・夕暮

氏等と共に牧水編輯にて「創作時代」が創刊されたがすぐ廢刊。（因に牧水先生は昭和三年九月十九日不歸の旅に登られた。）

上述の通りで後年アララギ派が萬葉模倣歌を高唱して歌壇の主流をなすに至るまで當代の思潮に棹して華やかにも牧水・夕暮對立時代を招來して青年學徒の羨望の中心であつたのである。

簡略ながら以上で時代觀を措き夕暮・牧水先生の藝術を鑑賞批評しようと思ふのであるが然し僕自身直接に檢討することを控へて作品を以てそれに代位したならば或はより以上に作者の藝術に觸れ心境を味到する効果の大きい事に思ひ至つたので（紙面の都合も考慮し）茲には唯牧水・夕暮先生の作品を年代順に羅列することに留めよう。

更に云ふ。藝術は趣味ではない。よりよい社會。よりよい生活を示唆し示現するが爲の誠の叫びであり。眞摯な人生の相。生活の刻相である。詩形は小さくとも短歌も亦一般文藝論とその軌を一にするもので趣味を以て葬るべきではない——廢頽と進展との岐點はそこに孕まれてゐる——で僕がこの偉大な歌人の足跡を檢討し揚棄しようと努めるのは、よりよき明日の生活を指摘し發見しようとする意圖が熱藏されてゐるからに外ならない。

□夕暮先生歌集抄

悲しみの眼と眼かはして口固くつぐむに似たり秋の山山

こしかたも來しかたもみなうつくしき僞りなりきうら若き日の

春ふかし山には山に花咲きぬ人うら若き母とはなりて

——（歌集　哀樂・收獲抄）——

摘みとればはやくろぐろと枯れそめぬ冬磯山の名も知らぬ草

かへらぬ夢悲しむ如くたえず啼く湖近き山の黒つぐみ鳥

眼鏡とればやや進みたる近眼のいたみをおぼゆ初秋の風

——（歌集　陰影から）——

向日葵は金の油を身にあびてゆらりとたかし日のちひささよ

雪のうへに空がうつりて薄青しわがかなしみぞしづかに燃ゆる

樹に風なり樹に日は近くかがやけりわれ青き樹にならばやと思ふ

——（歌集　生くる日に抄）——

冬の日のまあかく空にしづむころ白き印度の孔雀をみたり

一羽ゐて寂しき孔雀番(ツガヒ)ゐて更に寂しきましろき孔雀

日のけぶる雪の野面に青空のはるけかりけり馬圓をゑがく

——（歌集　深林から）——

手握れば海のさかなのつめたさよひくひくとうごくわが掌に

春あさしうしほのながれ大空のいろよりさむくながれたるかも

びようびようと尾太き犬は耳たてて霧のなかなる朝日子に吠ゆ

——（原生林から）——

出水川あから濁りて流れたり土より虹はわきたちにけり

腹しろき巨口の魚を背に負ひて汐川口をいゆくわかもの

夏されば木の花しろく雜草の花あかくして山は樂しき

朝風にふきあふらるる青樫のざわめくきけば既に春なり

——（歌集　虹から）——

自由律に轉向してからの短歌抄

曇天の青泥色の港だ。千九百三十年の憂愁をぎらつかせて

綠色のパジヤマをぬぎすてた十勝平に野生玫瑰のやうな日が照りはじめる
遠い過去がいきいきと甦つてくゞる今の境涯はまるで露天掘だ
あかめがしの若葉が明るい層をなして青天の香氣に燃える五月！
向ふ山の青樫の若葉がひときわ此村をあかるくする朝風！

□牧水先生歌集抄

いく山河越え去りゆかば淋しさのはてなむ國ぞ今日も旅ゆく
山ねむる山のふもとの海ねむるかなしき春の國を旅ゆく
白鳥はかなしからずや空の青海のあをにも染まずただよふ

——(歌集　別離抄)——

海底に眼のなき魚の棲むといふ眼のなき魚の戀しかりけり
秋風のそら晴れぬれば千曲川白き河原に出てあそぶかな
わが足のつきたる土もうらさびし彼の蒼空の日もうらさびし

——(歌集　路上から)——

うす青き夏の木の果を嚙むごとくとじの三十路に入るがうれしき
山に入り雪のなかなる朴の木に落葉松になにとものを言ふべき
夏はいまさかりなるべしとある日の明けゆく空のなつかしさかな

——(歌集　死か藝術か)——

踏めばくづるる山の赤つち乾いたつちどこにしのんで蟇の啼くぞえ

わけとてはなくぢだんだを踏んでよろこんでみた喜んだとてなにになららうぞ
ひらかむとする薔薇、散らむとする薔薇、冬の夜の枝のなやましさよ

——(歌集　みなかみな抄)——

いついつと待ちし櫻の咲きいでていまはさかりか風ふけどちらず
手にとらばわが手にをりて啼きもせむそこの小鳥を手にも取らうよ
たけ高くわれ越ゆべしとおもひゐし雛頭は尺に足らで花咲けり

——(歌集　くろ土から)——

うすべにに葉はいちはやく萠えいでて咲かむとすなり山櫻花
花も葉も光りしめらひわれの上に笑みかたむける山ざくら花
年月のつかれいで來てわがやめば咲きてあざやけき夏草の花

——(歌集　山櫻のうた抄)——

遠干潟いまさす潮となりぬればあさりをやめて鶴は舞ふなる
麥の穗の風にゆれたつ音きこゆ雀つばくら啼きしきるなかに
をりをりに姿見えつつ老松の梢のしげみに啼きあそぶ鳥

——(歌集　黑松から)——

冬の彥根——自由律(基準律)短歌

平　井　乙　麿

葦の私語する濠端。薦と。雪と。城と。寳に彥根は古風な版畫です
古風な版畫。薦と雪と城と。そして軒のひくい町が眠りかけて來た
曇天を告げる十二月の暗い顏が汚れた濠にうつつてゐる

折れた葦をどう眺めてもさびしいのだ湖には湖の草がさびしくゆれて——
葦の言葉がだんだんにわかる氣がして葦のなかに私はゐる
油のぎらつく泥港に寒くうつつてゐる枯葦——廢船に凭れて
廢船に凭れて枯葦が無調子にゆれてゐて——不健全な生物
油の流れた泥湖の港に葦の影が寒くうつつてゐる。裸木の枝もまじつて
汚れた船着場を裝飾してる一九三〇年の〝あぶなげな月
湖なりが地表をゆすぶり裸木がかたむき葦が折れて十二月だ
いらつ心を靜め靜め來たらああ湖には死魚が流れてゐて〝寒く！
泥餡のやうにひよろひよろ感情がもぐり込む雜踏した師走の意志のなかへ
腦髓の髓まで挑みかける赤い幟を拂ひのけ拂ひのけ來た湖の阿呆みたいな廣さ
ほうほう風に吹かれてゐる葦のなかで自己を發見しようと苦慮する若者！
冬の光がとかげのやうにちろちろ光るあてもなく裸木林をさまよつてゐる僕
サボテンから採れた繪の具でもこんなには滴らないだらう——紅い夕燒
繪の具のやうな夕燒でづくづくに汚れた休を洗はう湖の冷い水の色
金屬製の玩具のやうな鳩がぴかぴか飛んで十二月のとても廣い空
裸木の影で幾つかに切斷された僕の影を鳩にふませてゐる親しさ

困苦の利用價値

第五學年　水　波　淳

「どうか私にもつと苦難を與へ給へ。」と戰國時代の雄、山中鹿之助は或る夜月を拜んだ。

豐臣秀吉は若い時、他の人が「天下泰平、國家平穩」と神に祈るのに彼は「天下大變、國家動亂」と祈つた。

彼等は勿論苦難そのものを望んだのではなく、それに依つて與へられる自分自身の鍛練を祈つたのだ。

多くの人は、どうか苦しまずして成功しますやう、もつと樂になりますやうにと希ふ。併し「苦は樂の種」「艱難汝を玉にす」と言ふやうに、どうして困苦なくして事を成し得ようか。樂を迎へようか。

昔から偉人と言はれ、豪傑と稱へられる、人は必ず艱苦と鬪つた人である。言はば彼等は困苦によつて培はれた人格の現はれである。

併しながら苦難は其のままでは決して吾人の人生に何等の價値も齎さぬ。吾人が之に打勝ち、之を征服し、之を利用して自ら鍛練の槌とせねばならぬ。かくてこそ吾人の困苦は益々大いなる利用價値を發揮するのである。

然らば如何にして吾人は之に勝ち、之を利用するを得るか。それは始めに述べた二人のやうに苦難を避けず、之を歡迎することだ。それは丁度血清療法に用ふる血清を造るやうなものである。吾人は苦難に遭遇すればする程、抵抗の強い性質を持ち得るのである。

困苦を避けるな！　特に我々青年はさうすべきだ。

自ら之にブチ當つて、之を一擧に粉碎する覺悟を忘れてはならぬ。

暖衣飽食、大厦高樓に臥し、享樂に日を送つて何等の苦痛なき人は果して幸福であらうか。

「此の世を我が世」と思うた藤原氏は何故に衰へたか？　何故奢る平家は久しくなかつたか？その第一の理由として彼等は苦しみが少くなつて安逸に流れ、浮華放縱となり、少しの困苦をも解しなかつたことである。かくて我が世と思うた天下も武士と言ふ田舍者に取つて代られ、富士川の水禽の羽ばたきに假寢の夢を破られた時は既に遲く、敵に對抗する力も勇氣も持たなかつた。

我が國の現狀を見ると、內には思想問題、勞働問題、人口問題、或は食糧問題等に惱まされ、外には米國、支那の排日運動あり、今や我が國はたしかに困步艱難と言ふべきである。併し吾人は悲觀せぬ。國亂れて忠臣出づで、此の國難は我々の胸の內に眠れる先祖傳來の大和魂を呼び覺し、必ずや此の難局は處理せられ、國難はうまく利用されて、更に更に國運の發展の機運を作ると信ずるからである。

何人の人生史も皆、苦と樂により彩られてゐるが、併し吾人の人生より苦しみを去つたら人生航路は如何に味はひの少いことか。

古傳說中のアダムとイヴが禁斷の木の實を食つてくれた爲に我々はまことに生き甲斐ある人生を送れると言はねばならぬ。だが吾人は徒に人生の困難を讃美するものではないが併し吾人の人生から此の困苦を除きたくない、否寧ろ此の困苦に依つて吾人の心身を錬へ以て忠良な臣民として其の本分を盡さねばならぬ。

宗教を觀る

五年　種村捨三

南無阿彌陀佛、南無妙法蓮華經、アーメン等と、思ひ思ひの宗派の經文を信者は稱へる。我等若い者から見れば、思はずふき出しさうになるが、本人の眞劍なのに對しては、我等の思慮のない態度に愧じ入る事が往々ある。未だ宗教の何物たるか。其の眞相をとらへる事が出來ぬのが吾々の時代である。理解がないから神に感謝し佛に拜禮する氣も起らないのである。然し乍ら自己が獨立して生活するに當つて、不虞之難、人倫之變に際して、或る一種の不安にとらへられるであらう。其時には宗教信仰の必要な事が吾等の胸に油然と湧いて來る時があるに違ひない。宗教の信仰はこのやうな人生の缺陷とかいふのを補つて、慰安の中に命を終らしめるに必要である。で我等は晩かれ早かれ當然ぶつつかるのである。

如何に學識が優れ、人格が高潔であつても、無宗教の人は、何處かに物か物足らぬ樣な氣がする。之に反して母の樣な慈愛をそなへて、温厚圓滿な人格者が居る。人の事蹟の中で何が一番偉大かと問はれたら直に答へよう。宗教家の事蹟であると。といふのは宗教開祖の教が幾千年を經た今日、依然として世道人心を支配してゐるを見れば、うなづかれるであらう。ナポレオンの覇業が如何に偉大であり、超人的であらうとも、到底同日の論ではない。キリストは讒奸の手にかゝり、盜賊と並べられて、三十三年の短命を以て十字架の露と消えた。釋迦は一國の王子と生れ、王位と妻子を捨てゝ山林に籠り、苦行六年終に人生の奧義を極め、無上の正覺に徹底した。席暖まるに暇なく生傷の絕えた事のなかつたと言はれる日蓮は、あらゆる障害を冐して辻說法に餘念のなかつた苦心も言語に絕するではないか。この樣に現世の禍福と一身の安危とは毫も顧みず徹頭徹尾佛教の方で言ふ衆生濟度の爲自身を犧牲にせられた人々であつた。此の粉身碎骨の苦心が何故報ひられぬ事があらうか。終に實を結んで、幾世紀を經た今日我等はかの人々の恩惠にひたる幸福者となつたのである。かうして宵の明星の樣に慈愛の光を瞬かせ乍ら、暗澹たる人生の社會に偉大な光明を點じて行路を示して貰つてゐるのである。繰返し言ふ。宗教家の事蹟程影響の大きいものはない。

死後天國に行くとか、極樂へ參るとかは別として死後の爲に佛教を信仰する、基督教を奉ずるといふ許りではないと思ふ。未來よりも現在に於て、信仰に依つてあらはれた無限絕對の力、尊い慈愛の光を暗夜の燈明、船舶の羅針盤とも賴んで人生荒涼の大海に棹さゝねばならぬ。而して信仰の依憑が崇高偉大なればなる程、獲る所の信仰の力乃至幸福も高く大きく又尊い譯

である。信仰には一木一草を對象とする如き幼稚な迷信を始めとして、その實質に於て、表現に於て、結果に於て、實に千差萬別である。吾等人生の眞意義を解し眞實に生きんとして信仰に逢着する時、この點を大いに考へねばならん所である。

死をして價値あらしめよ

第五學年　北村正久

自分が此の樣な暗い理論的な事をのべるのは多少自分の性質と相反してゐる樣ではあるが、今夏季休暇京都に於てふと心の奥深くきざみ込まれた事があるからである。

自分が滯京して約十日程たつた或る日、友人S君と南禪寺へ散歩に出かけた。朝より快晴。炎熱にあへぐ人々が一時なりともこの世界より逃がれやうと水にたわむれてゐる疏水を左手にながめて、足を運ばせてゐると人が多勢群がつてゐる。其の多人數の割合に極めてもの靜である。その後ろの方から伸び上りざま人の頭と頭との間を見附けて前の人の脊中へもたれかゝる樣に、そして目を少しでも高くしてやうやく群集の視線の中心のものが見えた。それは川岸に横たはつた人である。死人である。この炎熱の爲の犧牲者だ。此の多人數の河童の中で彼一人が無論神のいたずらではない。かれの運命だ。

服裝否彼の側の着物から推して見ると、相當とは云へないが下流以上の家の子供らしい。その筋肉も決して逞しくない。身もあかぬけした色、顔には罪のなさそうなほゝゑみと云ふよりも、むしろ苦しみの相をあらわしてゐる。あたら十か十一を最後としての死としてはいたましい。

日ごろの嚴しい態度とは打つて變つた、温かそうな人情味たつぷりの警官が人夫を指揮してしとやかに何れかへ運ばうとしてゐる。然るに彼の兩親は未だにかけつけてゐないらしい。この疏水にあたら命をなげた小供の靈を父母によつてなぐさめられ

ない中にいづれかへ運ぶとは………。

いつの間にか人々は會葬者の樣な氣分になつて居て具體的に手をあわさんばかりである。默送を續けてやゝ暫らくは、たゝずんで居た。中にはホツとため息さへ吐いて、如何にも知るべの最後を送つた樣な心持でしと〱と四散して了つた。

僕も側にS君が居るのも忘れて「あゝ」と嘆息をもらさざるを得なかつた。僕は兩手にぐつしよりと汗が出て居た。

さて二時間後驛へと電車に乘つたすると今日はよほど妙に死んだ者に縁がある日と見えて四條の方から一隊の葬列が遣つて來るのに出くはした。軒並びの店の前には主人も番頭も下女も澤山、又横丁からも出て——多分葬式があるのを知つてゐるのであらう——愉快さうにニコニコして見て居る。お祭の御輿が靜かにやつて來る位に考へて居る、僕の側の半白の髮の中老人は無論無縁であらうがそれをいくらか縁のつながりでもあるかの如く、ひきしまつた顔付で葬列の方に氣を配つて居る。

靜かな葬列は露拂ひを先頭に美しい生花造花の色とりどりに織り交ぜて、それを擔いだ人夫が二列縱隊に半丁餘も續いて居る。その次に自動車隊——其の中に靈柩自動車がきらやかに——が、坊さんやら、會葬者等が乘つて居るのであらう、しずしずと來る實に威風堂々たる葬列である。靈柩の主は何人であらう。多分此の邊の大問屋筋の主人であらう。電車の中でも皆の目が一樣にある一點に引きつけられる樣に注がれる。

僕はつくづく一生を考へた。人間と生れて先程疏水で見たあの慘めな、若年にしてあたら生命を失つた少年と今の素晴しい葬列の靈柩におさまつてゐる大人との死への旅の甚だしき差異を痛烈に感ぜずには居られなかつた。

自分にとつては何の縁もない人間ではあるがやはり同じ同胞だ。その彼等が同じ源より生れて黄泉の地へ流れるにあゝも大した、違つた流れ方をするとは……。

生——死は皆貴賤貧富を問はず、人間として生れては逃れ得ざるものだ。然し何となく自分は口にも筆にも——單に心の内のみしか——云へない人生の慘めさを感じた。

溺死と聞くからに感じの悪い体を然も現實的に見たのと美しく金ピカの靈柩車を通して中の體を想像的に見たのとは大いに

その人への感情に同じ死にせよ慘さを感ぜしめる。

我々が生より死へ皆一樣の——大同小異はあるが——生活をして行くもののその末路に於てかくも、へだたりがあることは實に神のいたずらにせよ、人間ならばかなしみ、いやある云ふに云はれない悲哀を感ぜずにはをられない。朽ちれば共に道の埃とは昔より云はれてゐるが然り。

生死皆神のいたずらか運か!。いたずら、にせよ運にせよ同じ人間として生れたのならば、目的地は同じにせよ末路を飾りたいものである。

苦難の惠

第五學年　北村正久

闘東大震災で三十萬近くの、罪の無い女子供が燒け死んだり（火災の爲に）其他天變地異の爲に何百萬何千萬の尊い生命が一瞬にして消え去つたり、又近時流行の强盗の爲に一家皆殺しの憂目を見たり、其他、毎日々々各新聞は無數の世の中の慘めな事件を報じてゐるのを見て諸君は思はず次の樣な淺はかない疑問を起すであらう。「神や佛は何故我々否人間に不幸を與へるのか?、世の中には不幸な苦難にあへいでゐる、淚の人が餘りに多すぎる。神が眞に慈愛の權化であるならば、又佛が眞に慈悲の權化であるならば何故に世の中にかくも多くの不幸の人を作るのか?。」實際に諸君のみでなく此の世の中には不幸な人、淚の人、苦難にあへいでゐる人が多く生存してゐる。諸君等のみでなく此等の人々も、この樣な疑問を懷くことであらう。

人間は苦難に對しては弱いから。

然し一歩退いて考へて見よ。若し此の世の中から一切の不幸を取り去つたらどんな結果を生ずるか?。一あつて二あり二あ

つて三ある如く不幸有つて幸福あり、不幸のない所には幸福はないのである。されば神佛は人間を幸福にならしめんが爲に不幸の世界を作られたのである。心一つで幸福にも不幸にもなれる。この心の持方卽ち人間の自由意志は神の人間に與へた幸福であり愛であるのである。如何なる境遇運命に遇ふとも幸福になり得る心の持方卽ち自由意志が不幸に對しての神の眞の愛であり佛の眞の慈であるのである。蓮の花は泥地よりしてあの立派な花を唉かす。實際に幸福の花は苦難の畑より唉く。我々は此れにより神への疑問は解けるであらう。されば我々は不幸に對して感謝せねばならぬ。

さて此に自分は神の人間に與へる不幸は神の人間への愛であり慈であると云つたが、不幸の愛は如何なる人に與へられるかと心をひるがへせば、愛は善者に與へられるのである。

されば善男善女はこの不幸な世界に落ちず心がけの惡い人罪を犯した人がこの世界に落ちると考へるであらう。然るにこの世の中は此に相反してゐる。罪なくして泣く人が餘りに多く罪人惡人が安樂にふけつてゐると云ふ事に驚かされる。

然らば何故に神はこの不公平を矯めないのか。罪なきものがしいたげられてゐる。一寸考へると如何にも此れは矛盾してゐるやうではあるが目を閉ぢて胸に手をあてゝ考へて見れば此の疑問は自ら晴れるであらう。晴れなければその人は人間といふ名前のついた動物にして眞の人間ではあり得ない。

境遇、運命の不幸と心の樂、平和と、境遇運命の樂と心の不幸とに思を廻らせば此の疑問は自ら晴れる。聖人、賢人、義人、皆心の平和を保ちて境遇運命には一分の心をもとめなかつた。その結果如何なる迫害も顧みずおのれの心の平和の中心を世人にひろめて不幸の淚の世界に喘いでゐるものを彼等の心に及ぼさんとした。此れが世に云ふ「さとり」である。不幸の極點は幸福即ち心の平和「さとり」であるのである。故に凡人と云へどもこの不幸の極點なる「さとり」の一端につかまらんと、法律道德、宗教藝術を通して努力してゐる。

神佛の仕事に無駄は無い。不幸に苦しんでゐる人は必ずどこかでその種を蒔いてゐる。この種を求めよ取り入れよ。一點自利心のない至誠の努力が猶迫害を受けるならそれこそその人は人類の爲に十字架を負ふ使命を果すべく選ばれたのだ